

☆
子ども会 (学習会) だより
☆

MY SKY 第29号

☆
☆

マイ スカイ

1997年2月10日火曜日発行(毎週火曜日定期発行)

発行者
板野中学校
学習会
編集・文責：吉成正士

ちょっと遅れましたが、シャンテのコンサート、行ってきました。(この前お屋の放送でもかかってましたね)モノホンに行ったのは初めてだったわけですが、やっぱり「よかったあ〜」の一言に尽きます。何回もビデオを見てて、知ってる曲がたくさんあったということもあるのですが、曲の一つ一つを口ずさみながら、また一つ一つの歌詞に手を動かしながら、十分満足いく時間を過ごすことができました。特に最後にもらったメッセージには、久々に鳥肌の立つような、血の湧くような、ジーンとくる感動がありました。

…オレたちは、いつも雑草でありたいと思うてます。しかもね、敢えてキレイに咲く花の横で生えてやろうと思うてますねん。みなさん！キレイな花の横に雑草生えてたらどうなると思います？抜かれるんですよ！でもね、それでもまた生えてきたらうと思うてますねん。抜かれても抜かれても、生えてきたらう思うてますねん。堂々と生えたらう思うてますねん。コンクリートだろうが、アスファルトだろうが、どこやろうと生えてきたりますねん。オレたちはそんな雑草になりたいと思ってます…

あっさりと言ったようにも思えますが、実に中身の深い言葉だと思います。みんながこんなたくましい生き方ができればいいのですが、なかなかそういうわけにもいきません。実際に、「障害」を持つ人にとって解決してほしいこととは、町中の段差を無くすることもそうですが、もっと他に、就職、自立、結婚(恋愛)、出産、育児、生活と、たくさんあるわけです。これらの悩み一つ一つが、私たちにはわかってないんだと思うのです。もっともって学ばねばいけませんね。そんなことを改めて考えさせてくれる良い機会でした。

板野町のみなさん、できることなら、文化の館「さくらホール」にシャンテを呼んでみませんか？



◎ステキなステキなプレゼント (大阪府寝屋川市立東小学校全同教報告集)

先日、予期せぬ贈り物がやってきました。大阪の寝屋川市立東小学校からなのですが、

昨年11月から12月にかけて長崎で行われた全国同和教育研究大会の報告書です。全体学習などのつながりで連絡を取り合っているのですが、今回PTAの感想を報告書としてまとめたようなのです。読んでいくうちに、「これは他の人にも読んでもらいたい」と思いましたので、紙上をかりてご紹介したいと思います。ちなみに、文章は教師ではなく、保護者のものです。なお、紙面の関係上、抜粋にしております。

差別は親の心にあるのでは

寝屋川市立東小学校5学年PTA

11月30日、12月1日、第48回全国「同和」教育研究大会に、初めて参加させて頂きました。

「同和」教育は、子どもが入学して知りました。人を差別してはいけないことは理解しているつもりでも、私は「同和」教育を特別な教育として受け止めていたので、正直なところ、行くまでは重荷でした。

全体会場では、「同和」教育を積極的に取り組まれている、2万人もの大勢の人の姿に大変感動しました。また、この大会を通して、「私自身が正しい認識を持つことが大事だ」と深く自分を振り返ることができました。

分科会は、北九州市の小学校教師たち5人による「反差別の願いを胸に」に参加しました。それは、未来の子ども達に「音楽と自然な出会いを」と企画された奇妙なバンド名「願児我楽夢」の人権コンサートでした。

宮崎さん(リーダー)たちは、「借り物ではなく、自分の言葉で、自分の語りを、そこで感じたものを、提起しよう」と話し合って来られたそうです。

コンサートでは、部落差別を始め、「障害」者差別、在日外国人差別、島差別などをテーマとした曲を演奏されました。一曲一曲に、差別を許さない気持ちが込められていました。その中で、部落差別のため、大好きな友達の誕生日会に招かれなかった少女の悲しみをテーマにした「A子ちゃんが悪くないのよ。お母さんが悪いのよ」の歌がとても印象的で、私は胸の締めつけられる思いがいっぱい、涙があふれてきました。

戦後50年たった今でも、信じられない事実でした。誕生日のプレゼントを持って、何時かかってくるかと長い時間、友達からの誘いの電話を待っていたKちゃんに、電話はかかってきませんでした。Kちゃんが被差別部落に生まれたという理由によるものでした。Kちゃんは、おばあちゃんにボツリと言いました。「きっと近所のお友達、大勢遊びに行ったので、お茶わん足りずに、A子ちゃんは困って呼んでくれないかも」

A子ちゃんはKちゃんを誰よりも呼びたかったのに、お母さんが、「Kちゃんを誕

生会に呼んではいけない」と言ったそうです。

「どうして！許せない！そうさせるのは、大人の、親の心の中にあるんだわ」と、私の心の中はかきむしられるような思いでした。子どもを育てる上で私たち親としてどうであるかを考えますと、やはり現実^{せけんてい}は、世間体とか、親の立場を利用して、子ども達の心を傷つけているのではないかと思いました。私たち親の心に「差別」という醜^{みにく}いものがあるといっても過言^{かごん}ではないと思います。

「ある少年の家に友達が初めて来ました。母親は、友達を見たい一心^{いっしん}で何回かお菓子や飲み物を持って行きました。その少年は、母に向かって、『字も読めず、書けないのに、うるさい！』と怒鳴^{どな}りました。その少年が、私です。」と自分を語られた宮崎さんの目から涙があふれ、ハンカチで拭く手が震^{ふる}えておられました。

お母さんは小学校2年の時、「おまえら、明日から学校に来るな」と言われ、それ以来学校へ行けなかったそうです。「命」の尊厳^{そんげん}を、まるで虫けらのように片づけていった非人間的な行^{こう}為^いは、絶対に許せないと思いました。今まで、遠い国の出来事のように思っていた事でしたが、世の中に被差別部落の人たちを差別する心が、このような行^{こう}為^いを生んでいるんだなあと痛感しました。

差別を無くす取り組みは、話をするだけでなく「音楽で訴える方法もある」と言われているようです。この「願児我楽夢」に心から感動した出会いがもて、たくさん学び、たくさんの事実を知ることができました。

『「同和」教育は、もういらない』という風潮^{ふうちよう}がありますが、事実を知らない事は“差別を生む”。私もそうであったと思います。

「同和」教育は、特別なものではなく、私たち親が正しく受け止め、未来の子ども達に正しく伝える義務があるのではないかと思います。

二日目の夜、それぞれが参加した分科会で学んだことをもとにして、先生方とお互いの生活を語り合い交流を深めました。長崎に来て素晴らしい出会いと思い出ができました。最後になりますが、全同教大会に参加できたことを心より感謝します。

★ ★ ★ ★ ★

自分の心の中にある差別性に気がつく

寝屋川市立東小学校PTA

今回、第48全国同和教育研究大会が長崎で開催^{かいさい}されました。約二万数千人の人々が、長崎県立総合体育館^{しやうけつ}に集結した姿を見た時、何か胸の中に熱いものを感じました。

特別報告では、被差別部落出身^{ひばくたいけん}で被爆体験^{かたべ}の語り部として活躍^{かつやく}されている長崎県同

和教育研究協議会の梅本さんから「長崎の部落の歴史と原爆^{げんばく}」についてお話を聞きました。

原爆によって兄弟や妹をなくした悲しみと部落差別^{にじゅう}の二重の苦しみを背負^{せお}って生きてきた中で、「命の尊さ・人権・平和の在り方^{あ かた}を考えてほしい」そして「人の痛みのわかる子、差別に負けない強い子になってほしい」との願いから72歳になっても語り部として活動を続けられているそうです。

今年の7月、中三のお孫^{まご}さんが長崎市内の中学校弁論大会で「おばあちゃんに学んだこと」というタイトルで出場されました。祖母^{そぼ}をはじめとして、多くの人々が、以前からいわれのない差別を受けてきたことへの不合理性に目を向け、修学旅行の語り部として、真剣に取り組んでいる様子を弁論の中で訴えたそうです。

その事を通して、「私が、何も言わなくても信念^{しんねん}を持って生き、貫き通そうという思いが孫の目に映^{うつ}ったのだと思います。だから、これからもこの生き方を貫き通さなければならぬと感じました。」と、せつせつと語られました。

梅本さんの生き方から、戦争という悲惨^{ひさん}な時代の中で、部落差別に負けないで生きてこられた力強さを感じました。また、差別を無くしていくためには、理屈^{りくつ}や理論^{りろん}だけでなく、“心で感じ”・“心で訴え”・“人を信じる心”が大切だということを改めて学びました。

全体会の後、分散会に参加し「願児我楽夢^{がんじがらめ}」のコンサートを聞きました。なかでも、リーダーの宮崎さんの語りが特に、心に残りました。

「ある少年の家に、初めて友達が遊びに来ることになり、少年のお母さんは仕事を休んで、せっせと食べ物や飲み物を一つ一つ運んできた。母の姿がはずかしく少年と母との間で口論^{こうろん}となった。その少年は母に対し“字も書けんやつが何を偉^{えら}そうなこと言ってるんや”と怒鳴りつけた。それ以後、母は少年の部屋には入って来なかった。それを言ったのは私自身です。」と。大人になって、その時の母の気持ちや自分の思いを歌^{うた}に綴^{つづ}っていかれました。

コンサートの中で、宮崎さんは「被差別部落出身である私は、差別を受ける被害者^{ひがいしゃ}であると思っていたが、自分の母に対し、加害者^{かがいしゃ}になっている自分に気づいた」と語られました。

それを聞いているうちに、私の母に対する己^{おのれ}の差別性に気づきショックを受けました。

私の母も小学校3年の時から働いていました。祖父は喘息で働けず祖母は、“わらじ作り”の収入だけで生計を立てていました。そんな貧困な暮らしを助けるため、学校にも行きたかったが、行けずに働いたそうです。だから私には大学まで行って欲しいとの願いから、“一生懸命勉強してるか。お前のため思って言ってるんやで”とよく言いました。その度に私は、“また言うてるわ、うるさいなあ”と思ったものでした。

母は、小学校もあまり行っていないわりには、簡単な字ぐらいは書けるのですが、私が大きくなるにつれ“これ書いて”と言って持って来る母に対し“そんな簡単なことぐらい自分で書かんかったら、ほんまに書けんようになるで”と言っていたことを思い出しました。私は頭では、母の苦勞について理解もしているし、思いやりや優しさなど、人一倍わかっているつもりでした。でも、心のどこかに“こんなものも書けんのかと、バカにしていた”所があったことに気づきました。

宮崎さんの言葉は、私にとっては、衝撃的でしたが、「やっと、自分の母を自分のものにできた」といううれしい思いの残った、全同教大会でした。また大会で学んだ「同和」教育の温かさや多くの仲間の熱意をPTA活動に広げたいと思いました。

人権が守られなければならないことは、みんな知っていると思います。でも、いろんな人と人権問題について議論したり、正しい知識を得る機会が少ないために、独りよがりな人権意識になっているかもしれません。大人も、子どもと共にもっと深く人権問題・部落問題について学ぶべきではないでしょうか。

次回は、「日本人が見過ごしがちな、差別意識とつながるように思えること」について、最近の私の生活から感じたことを例にあげながら記してみたいと思います。お楽しみに！



◇ これからの日程 ◇ ◇ ◇

え～ところで、「君の手がささやいている」とか「歩いていこう」という本はご存じでしょうか？「障害」者を扱ったマンガで、2年生の子が持ってきてくれて、私も読んでみたのですが、これが結構よく描けているんです。お暇な方はぜひ読んでみてください。板中の図書室にも置いてもらうようにします。マンガもバカにはできませんよ！



2月12日(水) 3年生学習会解放子ども会(18:00～19:30：総合センター)

16日(日) 3年生登校日

18日(火) 『MY SKY 第30号』発行日